

線のゆくへ part II

〈かな〉	遠藤枝芳	遠藤泉女	遠藤綾苑
大林靖芳	小倉春翠	岸本芳洋	後藤華陽
小林蓉風	佐野玉帆	佐藤芙蓉	鈴木紅園
鈴木蓉葩	高橋翠雲	田中一瑤	平野翠甫
藤岡抱玉	町田悠華	森廣青寿	八木梢葉
吉野玉庸	脇桂華	渡辺京華	和田白浪
〈前衛〉	石井抱旦	井上恵子	江草幽研
小川移山	草津祐介	木暮美紀	佐伯孝子
坂巻裕一	柴田丹鳳	白石弥生	榛葉壽鶴
杉山勇人	大楽悠雪	高橋清堂	竹澤順子
竹村美園	谷川ゆかり	中西浩暘	畑由紀
平蔵	堀内肇	松本丹芳	松本燁之
真鍋智浩	宮村弦	森紅汀	八重柏冬雷

4月18（火）～24日（月） 入場・参加無料

11～18（初日13～・最終日～17）時

感染状況により変更の場合があります

• ギャラリートーク

毎日13～14（初日14～15）時

• ワークショップ

リベルアートを楽しもう 小川移山

18日（火）15～16時

23日（日）14～15時

自分の名前を美しく書こう 八木梢葉

19日（水）14～15時

カオスマックアートを楽しもう 石井抱旦

20日（木）14～15時

仮名でミニ作品をつくらう 大林靖芳

21日（金）14～15時

墨と紙の不思議体験をしよう 石井抱旦

24日（月）14～15時

• シンポジウム 22日（土）15～16時半

線のゆくへ～仮名と前衛書の場合～

遠藤枝芳 遠藤泉女 竹村美園 平蔵

八重柏冬雷 八木梢葉 進行：杉山勇人

横浜赤レンガ倉庫 1号館2階

神奈川県横浜市中区新港1-1

231-0001 045-211-1515

JR・市営地下鉄 桜木町・関内駅15分

みなとみらい線 馬車道駅6分

主催 Ten・ten プロジェクト

後援 毎日新聞社

代表・問合せ 石井抱旦 0467-86-2615

▶かなと前衛書の接触は予定されている

栗本高行（美術評論家）

書の世界では、「かな」と「前衛表現」との間に一見して深い隔りがある。前者はいわゆる王朝文化に起源を持ち、後者は漢字を中心とする近代書の変革の只中においてその発想が準備され、第二次世界大戦後に鮮やかな開花を遂げた。かなの書は万葉仮名、草仮名、変体仮名の表記を含む日本語の文章を表現の対象とし、前衛書は漢字の書法を前提とした一字や少字数の表現を基盤に、その概念は線による抽象造形にまで広がっている。

このように、表現の実態から見て、両者は対極的な思想と作品を産み出してきた。なおかつ、制度的な観点からしても、「かな」と「前衛」は公募展の中で別々の部門に振り分けられていることから、互いの相違がより強化されたかたちで、全く別な発展の途をたどっていると言えるだろう。かなの書と前衛書をめぐって、強固なパラレリズムが成立しているのである。

しかしながら、近代の日本書に対する歴史的な検証の視点を導入すると、いったんはきわめて厳格に分離された領域に見えるこの二つの表現系列も、共通の語彙や尺度によって語ることのできる場面が多く存在することに気づかされる。

まず、書壇形成期の日本においては、「漢字」と「かな」双方の古典を学習した書き手が多くおり、最終的な表現の出口として、かなを選ぶ場合もあれば、漢字を選ぶ場合もあった。そして、漢字書の作家の中には戦後になって前衛書の実験に突き進む者もいた、というのが歴史の実相に即した見方になるのではないだろうか。

このような文脈に当てはまる作家に、たとえば、大澤竹胎と千代倉桜舟がいる。竹胎と言えはひらがな、桜舟と言えは前衛書、という通念がともすれば先行するのだが、彼らの代表作をつぶさに点検していくと、かな書と前衛書の区別は、どちらの場合においてもきわめて緩やかだったと思わせる節がある。

竹胎の《雨ニモマケズ》（1955年）は、可読性をかなぐり捨てるかのような大胆な筆致で、宮沢賢治の「心象スケッチ」としての詩世界を、紙面から余白を追い出すように、密集した文字の塊として呈示している。さらに、頻出する広面積の墨溜まりは意図的に配置されたように見え、今日の前衛書において重視される「抽象画的な造形感覚」に近い要素を認めることが可能だ。また、桜舟がものした《草野心平の詩・春殖》（1989年）は、大空間にひらがなの「る」を撥鐙法で定着しながら自在な布置で並べている。筆法論的な観点から、かな書と漢字書のアマルガムであると言え、その上で、きわめて前衛書的な「抽象」の思想を原典の詩に対してはたらかせている。

ここまで述べたのは、文字の書き表し方における「かな」と「前衛書」の通い合いであるが、同様の事態は、色彩の世界に踏み込んだかな書家と前衛書家の間にも成り立つ。考えてみたいのは、一楽書学院を設立した桑田笹舟と、奎星会の初代会長として前衛書を開拓した上田桑鳩との比較である。

笹舟は、料紙を自作したかなの大家として知られている。墨継ぎの方法や濃淡の差などの表現法があることによって、かな書の作家にはもともと潜在的な色彩感覚が要請されるものだが、料紙装飾を手ずからおこなうという決意の下で、彼は日本画的な素材にも精通した書家となった。そして笹舟が戦前からその存在に注目していた桑鳩は、戦後になってからはっきりと日本画に固有の素材である岩絵具を前衛書の創作に採り入れ、「彩書」の世界観を構築しているのだ。かなの巨匠と前衛書の泰斗は、「日本画」という共通の広場が可能にする知見によって、書における現代表現を結実させたのである。

さて、横浜赤レンガ倉庫で2023年4月に開催される書のグループ展「Ten・ten」の企画趣意は、アイデアの提供者で出品者の一人でもある石井抱旦が記すところによれば、かな書と前衛書を一つの舞台において無差別に展示することである。それは、ジャンル間の分断がますます進みつつある近年の書の世界において、強い問題提起の意識をともなった実験となるはずだと言う。「かな」と「前衛」がじゅうぶんな交渉を持たぬまま、別々の表現系列として推移してきているとの認識は、50名の出品作家すべてがひとしなみに抱えているものだと思う。しかし、現在のこの状況は、上に見たように、過去から連続しているわけではない。むしろ、近代書の遺産たる作品群についての記憶からの切断によってこそ、「かな」と「前衛」が相互に孤立している実情がもたらされているのだ。

このような憂えるべき書の現実を打破し、〈明日の文字と線〉を書くためのヒントを探るのに、今回の展覧会は絶好の機会を提供すると言えるだろう。かなと前衛書の接触面に、日本書の歴史の新たな筋書きを発見するための試金石となる企画である。